

不識塾が選んだ

「資本主義以後」を生きるための教養書

島田裕巳

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

はじめに
なぜ、リベラル・アーツなのか 中谷巖 6

I 「ポスト資本主義」時代を歴史から考える 中谷巖 34
與那覇潤『中国化する日本』をめぐって

不識塾OBが語る「教養の力」 ① 81
リベラル・アーツとは自分を自由にしてくれる学問だ 檜山太郎(東芝)

II グローバル人材のための「民主主義原論」 岐部一誠 87
小室直樹『日本人のための憲法原論』『日本人のためのイスラム原論』
佐藤優『国家の罨』／長谷川三千子『民主主義とは何なのか』
ライシユ『暴走する資本主義』
佐伯啓思『自由と民主主義をもうやめる』

河合隼雄『中空構造日本の深層』ほか

不識塾OBが語る「教養の力」

②

「これだけは譲れない」という一線を引く

平野聡(トプコン)

121

Ⅲ

比較文明史から考える「日本の未来」

吹野博志

126

伊東俊太郎『文明と自然』／安田喜憲『蛇と十字架』／
梅棹忠夫『文明の生態史観』ほか

不識塾OBが語る「教養の力」

③

鼎談——「最初の一球」を見逃す重要性

大辻智(日本通運)／廣瀬文久(テルモ)／葛原孝司(リクルート)

152

Ⅳ

不識塾で学んだ保守主義の意味

瀧澤弘和

162

松本健二『畏るべき昭和天皇』／佐藤優『日本国家の神髄』

不識塾OBが語る「教養の力」

④

鼎談——ギャップにセンチティブたれ

太田善久(リコー)／大野茂樹(アジア住友商事)／小林正忠(楽天)

184

V

西田哲学とステイブ・ジョブズ 小川尚登

191

野中郁次郎ほか『流れを経営する』／西田幾多郎『善の研究』

不識塾OBが語る「教養の力」

⑤

219

対談——「個人」として立つために

黒須聡(横河電機)／笠伸之(トプコン)

VI

異文化を知るにはまず宗教から 乾文子

226

中川健二『日本人に贈る聖書ものがたり』／八木荘司『古代からの伝言』

不識塾OBが語る「教養の力」

⑥

240

歴史から未来を展望する

伊藤尚志(三菱UFJ信託銀行)

VII

「日本人らしさ」の逆説 中村真理

246

長谷川三千子『からごころ』『日本語の哲学へ』／丸山眞男『日本の思想』／
萱野稔人『国家とはなにか』

なぜ、リベラル・アーツなのか

不識塾塾長

中谷 巖

本物のリーダーを育成する「日本一小さな私塾」

おそらく読者のほとんどは本書のタイトルを見て「『不識塾』ふしきじゅくって何だ、そんな名前、聞いたこともない」と言われることだろう。

それもそのはず、我が「不識塾」は毎年の塾生（受講生）が二十数名しかいない、きわめて小さな私塾にすぎない。いや、日本一小さな私塾と言っても言い過ぎではないだろう。

しかし私は、この小さな「私塾」がやがては日本の産業界を変える本物のリーダーを輩

出するようになる」と秘かに期待もし、またそれを実現するには何が必要なのかを日夜、模索しているところである。

この塾は私が三年前に一般社団法人『不識庵』ふしきあんの中に設立したもので、その前身は私が多摩大学学長であった頃の開講した「四〇歳代CEO育成講座」である。以来、一〇年間で卒業生総数は二五六名、平成二四年度現役塾生を含め二八二名。塾生はほとんどが日本のグローバル大企業から派遣されてくる幹部社員であり、平均年齢は四七歳。多くは部長クラスだが、会社によつては役員を派遣してくるところもある。

私は、これらの会社に対しては「将来、社長など経営トップに上り詰める可能性の高い最優秀な人材を送り込んでほしい」とお願いしつづけてきた。その甲斐あつて、塾生のレベルはきわめて高い。まさに日本のトップクラスの人材を集めることができていると思う。彼らとともに学び、切磋琢磨していて痛感するのは「日本企業はまだまだ大丈夫」ということだ。それほど彼らの吸収能力、人間としての成長ぶりが素晴らしい。

塾生が優秀だと何よりありがたいのは、通常のビジネス研修の枠を大きくはみ出した高度なカリキュラムが可能になるということだ。たとえば、「西洋の哲学・東洋の思想」というセッションでは、難解を極める哲学書として知られる西田幾多郎にしだきたろうの『善の研究』（本文203ページ参照）やデカルトの『方法序説』といった古典を課題図書にできる。塾生たちは

「絶対矛盾的自己同一」といった西田哲学の難解な概念や、「我^{われ}思う故^{ゆえ}に我あり」といったデカルトの発した言葉の真意を、苦しみ悶^{もだ}えながら何とか理解しようと、懸命に読みこなしてくる。

それにしても、デカルトに始まる西洋近代哲学と西田哲学をそれぞれの原典を読み比べて比較するという大変な作業をこなすことに何の意味があるのか。そう思われることだろう。だが、この二冊に向き合うことによつて、西洋人と日本人の発想がなぜこうも大きく違うのか、アメリカの企業と日本企業の経営手法がなぜこうも違うのか、といった根本的なことがだんだん分かるようになるのである。

あえて一言で言うならば、「主客分離」の二分法的発想をする西洋人と、「主」と「客」は分離できないと考える日本人——この発想の違いを理解するだけで、日本企業のグローバルな展開にずいぶんと役立つし、また個々の現場レベルでの交渉でも大きな力を発揮するのである。

不識塾ではこのほかにも「日本文化の真髄とは何か」「中国史をどう捉^{とら}えるべきか」「イノベーションとは何か」といった一見、ビジネスとは何の関係もないようなテーマを数々採りあげている。しかも、こうしたテーマについて、毎週のように超一流の教授や研究者が講師として登壇し、一日中、塾生たちと徹底的に討論を重ねるのである。

我田引水かもしれないが、私は日本中を探しても、これほどまでに内容が高度で充実し、問題の根本に遡さかのぼつてとことん考えさせる、経営幹部のための塾はないと思っっている。塾での学びの中身は、本書を読み進むにつれて徐々に明らかになっていくはずだが、ここではまず、「不識塾」といういささか奇妙な塾の名前の由来について説明しておきたい。

「識りません」と答えた達磨大師

「不識」については有名な逸話がある。

六世紀、中国・梁りょうの武帝ぶていがインドからやってきた高僧・達磨だるま大師に謁見した。

達磨大師については読者もよくご存じであろう。洛陽の嵩山すうざん少林寺において壁に向かつて九年も坐禅を続けたため、手足が腐ってなくなったとの伝説が伝えられるほど厳しい修行をした「中国禅宗の祖」である。

その高僧に向かって皇帝が「あなたは何者か」と尋ねたところ、達磨大師は一言、「不識」(識しりません)と答えたという。普通、お前は誰だと聞かれたら、「どこの某だ」と名乗りを上げるところだが、達磨大師は一言「不識」とだけ答えたのである。

なぜ達磨大師は自らの名前を名乗る代わりに「不識」と答えたのか。

これにはさまざまな解釈がなされているが、達磨大師は「不識」という言葉によって「人間をはじめとして、ありとあらゆる存在は空であり、幻にすぎない」「およそ物事の実体というものは表面的なことだけでは分からない。私たちは『識りえない』こともたくさんあるということを知らなければならない」と言いたかったのであろう。いかにも禅問答らしい話ではある。

しかしながら、人間というものは私も含めて、ともすれば表面的な知識やスキル、それらを使って展開される、もつともらしいロジック、そういうものですべて「分かった気」になつて満足する、浅はかな存在なのではないだろうか。

人間世界の実態ははるかに複雑であり、私たちが認識できないことも多い。目に見えていることなど、人間世界のごく一部であるにすぎないのだ。私たちが何かを学ぼうとするとき、まずはこのことを意識することから始める必要がある。そのことを意識せずに、浅はかな理屈を知ったかぶりで披露するとなると、あとで大恥をかくことになりはしないか。たとえばアメリカ経営学の蓄積はかなりのものがあるが、歴史や文化が根本的に異なる日本という国に「アメリカ流マネジメント」を導入することははたして可能なのだろうか。

現実が起こったことを振り返るならば、「行きすぎた成果主義」「定見のない選択と集

中」「近視眼的な効率重視」など、そのことによつて日本企業の競争力がさまざまな意味で削ぎ落とされていったのは事実ではないか。

そもそも黒人奴隷を大量にアフリカから買い付け、彼らを酷使することによつてプランテーション経営に成功したアメリカの歴史は、ちようどその同じ頃、歌舞伎や浮世絵など、庶民文化が花咲いていた江戸時代を経験していた日本の歴史とはあまりにもかけ離れている。そんな歴史の差を無視して、アメリカ的な経営戦略を日本企業に当てはめるのはそもそも無理なのだ。

事実、アメリカのMBA教育を受けて日本の会社に帰つてきた中堅ビジネスマンが、アメリカで学んだ戦略論や組織論をそのまま持ち込もうとして、それが役に立ったという話はほとんど聞いたことがない。組織風土や従業員の価値観の違い、階級社会の影響などについて深い洞察がないまま、アメリカの経営学を無造作に持ち込むことが、日本の会社にとつてどれほど危険なことか。

説明が長くなつてしまつたが、なぜ私が「不識塾」という奇妙な名前に拘こだわつたかお分かりただけであらうか。要は、表面的な知識やスキルの習得では物事の本質は分からない。根本に戻つて、謙虚にものごとの実態を深く掘り下げる努力をしてみようではないか、というのが「不識塾」の考え方なのである。

自らの姿を知らずして、他を理解することはできない

このため、「不識塾」における教育内容は、アメリカのビジネス・スクールで教えらるる経営戦略のようなスキル系のもではなく、歴史、哲学、文化、宗教、倫理、古典文学などのリベラル・アーツ(基礎教養の諸学科)を中心に据えている。カリキュラムとしては、まず日本の伝統や歴史、文化を学び、塾生が日本人としての自覚や「心の軸」を持てるように配慮して作られている。その後は世界の文明史、宗教、資本主義の構造などを学び、大局的な歴史観や世界観を育はぐくんでもらう。厳しいビジネスの現場で「生きるか死ぬか」の闘いに明け暮れている受講生たちからは「そんな悠長なことをやっている余裕はない」という悲鳴が聞こえてきそうだ。

ところが、塾を開校して最初に驚かさされ、かつ嬉しかったのは、四〇代の超多忙なはずの経営幹部たちが、目先のビジネスにはほとんど関係のないと思われたリベラル・アーツ教育を心底面白がって受け入れてくれたということである。

彼らは『善の研究』(西田幾多郎)や『方法序説』(デカルト)の難解な文章に苦しみながらも、日本の学校教育では不十分にしか学んでこなかった歴史や哲学、宗教の勉強を大いに

楽しみ、次々に出てくる新しい発見に感動しているのだ。

それにつれて彼らの知的好奇心はどんどん高まっっていく。このとどまるところを知らない知的好奇心があるから、彼らはまさに「砂漠に滲^{しみ}みる水のごとく」、新しい知見、考え方を吸収し、世界に通用する見識を蓄積していくのである。

「不識塾」は毎年五月に開講するが、最初の合宿では「世界の宗教」をテーマにする。

当然のことながら、塾生の中にはすでに海外駐在の経験者も数多くいる。彼らが開講合宿に参加しての共通した感想は「このような、宗教に関する『常識』を駐在前に知っていたらどれだけ駐在生活が楽だっただろう」というものだ。

たとえば、イスラム圏に駐在し、そこに暮らす人々と仕事をするのであれば、彼らの精神生活がいかなるものかを知るためにイスラム教の基礎を学ぶのは当然のことだし、イスラムの聖典である『コーラン』を一度くらい読んでおくのは礼儀というものだろう。ことにイスラムの場合、キリスト教、ユダヤ教との比較も重要である。しかし、日本では高校はもちろんのこと、大学でもそうしたことをきちんと教えてくれない。

いやそもそも、日本人の多くは身近にある仏教や神道の思想や慣習ですら、その内容をきちんと把握し、たとえば外国人に分かりやすく説明できる人はめったにいない。これでは他国の宗教を理解しようとしても、比較の基準がないのだから理解などできるわけもな

い。これが残念ながら現代日本の「教養」の実態なのである。

よって不識塾では、日本文化とは何かを学びつつ、それと併せて世界の歴史、哲学・思想、文化や宗教について学ぶことで、まずは自分の立ち位置を理解し、そのうえで世界を「相対化」できるようにカリキュラムを組んでいく。そうしていくことによつて、はじめて自分自身の抱えている仕事の意味付けや、自分が所属している会社の「軸」というものを意識するようになる。

「宗教原論」を学んだ塾生たちが「もつと早く宗教のことを知っておけばよかった」と言うのも、単に目先の利害ではなく、もつと本質的な意味も含んでいるのだ。

錚々たる講師陣

さて、当塾は原則、毎週、土曜日を開講しているが、塾生は単に受け身で先生の講義を受けるのではない。あくまで塾生たちが主人公であり、先に示したようなテーマ（西洋哲学と東洋思想はどう違うのか」「日本文化の真髄とは何か」「中国といかに付き合うべきか」「イスラームとは何か」など）に関して、まずは塾生たちが自分たちの仮説をプレゼンしなければならない。

それを聞いていた講師の先生が意見を述べ、議論が始まる。そしてその議論は朝から夕

刻まで続くのだ。塾生にとっては、長年専門家として研究を続けてきた講師の先生に対抗すべく、必死で準備せざるをえない。これが後々、彼らの大きな知的財産となるのである。

そのセッションに参加してくださった先生の一部を紹介しただけでも、以下のような錚々たる顔ぶれになる。このリストを瞥見^{べっけん}するだけでも、いかに不識塾の塾生たちが恵まれた、贅沢な時間を過ごしているかがお分かりいただけるであろう(敬称略。五十音順)。

青木保(文化人類学、元・文化庁長官)、安倍晋三(首相)、五百^{いおきべまこと}箇頭真(政治学・歴史学、前・防衛大
学校長)、伊東俊太郎(比較文明論、国際比較文明学会終身名誉会長)、梅原猛(哲学)、岡崎久彦(元・外交
官)、河合隼雄(故人、心理学、元・文化庁長官)、小室直樹(故人、哲学・経済学・社会学)、北岡伸一
(政治学、前・国連大使)、佐伯啓思(経済学)、櫻井よしこ(ジャーナリスト)、佐藤優(作家、元外務官
僚)、中沢新一(人類学)、野田佳彦(元・首相)、野中郁次郎(経営学)、橋爪大三郎(社会学・宗教学)、
長谷川三千子(哲学)、松岡正剛(編集工学)、水野和夫(経済学)、安田喜憲(環境考古学)、山内昌
之(歴史学)、山折哲雄(宗教学)、山崎正和(劇作家・評論家)、渡辺利夫(経済学、拓殖大学総長)。

それにしても、この小さな私塾に、なぜこのような素晴らしい講師が一日がかりの講義
をしてくださるのかと読者はきつと疑問に思われたことであろう。たしかに、どの方も研
究や執筆、公務などで忙しい毎日を過ごしておられる。めったなことでは講演は引き受け

ないという方もおられる。

しかし、そうした方々が「不識塾ならば、週末の一日をつぶしてもいい」と言ってくださるのは、この塾に集まるのがまさに日本経済の第一線で活躍している最優秀な企業人たちであるからだろう。彼らは日本のグローバル企業の中核経営幹部であり、しかも彼らは会社から嘱望されている最優秀なビジネスマンばかりであるから、頭もシャープだし、実務経験も豊富で、それぞれに「自分が会社を支えている」という自負心を持っている。このようないわば高い当事者意識を持った塾生たちと真剣勝負をする機会は多くの先生方にとってもそれほど多くはない。

そういう塾生だから、講師に対して「お説拝聴」とばかりおとなしく話を聞いているわけがない。「自分の社会人としての実感からすると、その説はおかしいのではないか」と真つ向から反論してくる者もいるし、「その説からすると、昨今の世界経済の動きはどのようなに見るべきか」という鋭い質問を投げかけてくる者もいる。どの講師も、こうした塾生とのやりとりが刺激的で面白いと言ってくださる。ある東大教授は「うちの大学院で授業するより面白い」とさえ言ってくれたのである。まだ世間のことをよく知らない学生に授業するのとは圧倒的に緊張感が違うのである。

初期の頃、講師の先生にお願いに行っても「不識塾？ 聞いたこともない」という反応

が多く、「そこまで中谷が言うのならば、一回くらい付き合おう」と腰を上げてくださった先生方も少なくなかった。しかし、そうした講師の先生方も講座が終わると「こんなに熱気のある講義はやったことがない。また来年も呼んでくれ」と言ってくださるのが常であつた。無論、こうした褒め言葉をいただけただけなのは塾生たちがいずれも優秀だからである。

なぜ不識塾には幹部候補生が集まるのか

ところで実は我々の塾の受講料は通年で五〇〇万円以上もする。この種の講座としては、受講料も言うなれば「常識外れ」なのである。

ただお断わりしたいが、この料金には年に二回行なわれる海外視察の経費も含まれている。これはよくある「視察の名目での物見遊山」ではなく、少人数のグループに分かれて個々にテーマを自主的に決めて行なうフィールドワークであり、どこに行き、何を見て、誰に会うかも自分たちでリサーチして、アレンジをしなくてはいけない。したがって、普通の観光旅行とは比較にならないほどのコストもかかるし、手間もかかる。

それは塾生も同じで、この海外視察のプランを立てるにしても、小グループの中でもデ

不識塾の課題図書一覧(平成24年度分)

	著者	書名	本書ページ	出版社
1	中西輝政	日本人としてこれだけは知っておきたいこと		PHP新書
2	松原久子	驕れる白人と闘うための日本近代史		文春文庫
3	梅棹忠夫	文明の生態史観	147	中公文庫
4	松岡正剛	花鳥風月の科学		中公文庫
5	河合隼雄	中空構造日本の深層	107	中公文庫
6	小室直樹	日本人のための憲法原論	93	集英社インターナショナル
7	中谷巖	資本主義はなぜ自壊したのか	88	集英社インターナショナル
8	梅原猛(訳)	古事記		学研M文庫
9	吉田敦彦	ギリシア・ローマの神話	108	ちくま文庫
10	橋爪大三郎	世界がわかる宗教社会学入門	109	ちくま文庫
11	中川健一	日本人に贈る聖書ものがたり I	157	文芸社文庫
12	長谷川三千子	民主主義とは何なのか	103	文春新書
13	伊東俊太郎	十二世紀ルネサンス		講談社学術文庫
14	ジョセフ・ニーダム	ニーダム・コレクション		ちくま学芸文庫
15	ルネ・デカルト	哲学原理		岩波文庫
16	小坂国継	西洋の哲学・東洋の思想		講談社
17	西田幾多郎	善の研究	203	講談社学術文庫
18	ブルース・ローレンス	コイラン		ポプラ社
19	池内恵	イスラーム世界の論じ方		中央公論新社
20	安田喜憲	一神教の闇／アニミズムの復権		ちくま新書
21	安田喜憲	蛇と十字架	140	人文書院
22	安田喜憲	山は市場原理主義と闘っている		東洋経済新報社
23	中沢新一	日本の大転換		集英社新書
24	サミュエル・ハンチントン	文明の衝突と21世紀の日本		集英社新書
25	中谷巖	資本主義以後の世界	242	徳間書店
26	與那覇潤	中国化する日本	35	文藝春秋
27	ロバート・B・ライシュ	暴走する資本主義	104	東洋経済新報社

28	エマニュエル・トッド	帝国以後		藤原書店
29	小島毅	東アジアの儒教と礼		山川出版社
30	鈴木貴博	「ワンピース世代」の反乱、「ガンダム世代」の憂鬱	67	朝日新聞出版
31	萱野稔人・神里達博	没落する文明		集英社新書
32	松谷明彦	人口減少時代の大都市経済		東洋経済新報社
33	ウォーラー・ステイン	アフター・リベラリズム		藤原書店
34	ウルリヒ・ベック	危険社会		法政大学出版局
35	国分良成(編)	中国は、いま		岩波新書
36	リチャード・マクレガー	中国共産党 支配者たちの秘密の世界		草思社
37	水野和夫	世界経済の大潮流		太田出版
38	カール・シュミット	陸と海と 世界史的一考察		慈学社出版
39	ロバート・B・ライシュ	余震(アフターショック)そして中間層がいなくなる		東洋経済新報社
40	木村敏	自己・あいだ・時間		ちくま学芸文庫
41	ニクラス・ルーマン	信頼く社会的な複雑性の縮減メカニズム		勁草書房
42	倉本一宏	持続女帝と皇位継承		吉川弘文館
43	倉本一宏	一条天皇		吉川弘文館
44	北岡伸一	グローバルプレイヤーとしての日本		NTT出版
45	北岡伸一	日本政治の崩壊		中央公論新社
46	孫崎 亨	戦後史の正体		創元社
47	山本博文	江戸に学ぶ日本のかたち		日本放送出版協会
48	山本博文	鎖国と海禁の時代		校倉書房
49	山折哲雄	神と仏		講談社現代新書
50	山折哲雄	近代日本人の宗教意識		岩波現代文庫
51	山折哲雄	ニッポンの負けじ魂		朝日新聞出版
52	中村隆英	昭和史(上)		東洋経済新報社
53	井上寿一	戦前日本の「グローバリズム」		新潮選書
54	井上寿一	戦前昭和の国家構想		講談社選書メチエ
55	野中郁次郎ほか	流れを経営する	201	東洋経済新報社

※太字は本文内で紹介されたもの(タイトル下の数字は本書のページ)

イスカッションを何度も繰り返すし、直前合宿も行なうくらいである。その視察には私や不識塾のほかの師範(指導役)も同行する。

一例を挙げれば、二〇一一年の秋の視察では、私の受け持ったグループはカシユガルからスタートして、ウルムチ、敦煌、西安、上海と中国を一〇日間で横断する旅行を行なった。主たるテーマは中国内陸部におけるエネルギー事情を調査することにあつたが、それも単に地方政府や研究施設などを回るのではない。たとえば、カシユガルで八方手を尽くして、同地に暮らすイスラム教徒の家庭を紹介してもらい、そこに暮らす人々と対話するセッションを行なった(そのときの経験については拙著『資本主義以後の世界』第8章に記している)。

ちなみに、私が随行した海外調査の中で最も印象に残っているのは、シナイ山の登頂であつた。シナイ山とは、モーゼが出エジプトをし、カナンの地に向かう途中でヤハウエの神からあの有名な十戒を授かつたときされる地である。ここには、世界中から熱心な一神教徒(クリスチャン、ムスリム、ユダヤ人)が集まつてきて、シナイ山に登り、ご来光を仰ぐしきたりがある。前日はシナイ山の麓ふもとにあるカタリーナ修道院で仮眠を取り、朝の一時頃に起きて暗いうちに登山を始めるのである。

深夜、敬虔けいけんな信者たちが黙々と登る聖地は清々すがすがしい雰囲気に包まれていた。一神教の原点とも言えるシナイ山は見渡すかぎり荒涼とした岩山であり、草木一本も生えていない自

然環境にあつた。このような厳しい自然の中では、人々は偉大で絶対的な力を持つ神を必要としたのであろう。日本のような四季折々の豊かな自然の恵みに囲まれた我々日本人とはまったく異なる宗教観（自然は征服されなければならないという感覚）が育まれたのは当然のなりゆきであつたらう。

聖地シナイ山登山は一神教の何たるかを我々に肌で感じさせてくれたように思う。ひじょうに貴重な経験となつた。

もちろん視察なのだから帰つてきたら帰つてきたで、その報告をまとめなければいけない。塾生にとっては、いわば社命での出張なのでレポートを書くのは当然ではあるのだが、しかし、それを書いて提出するだけでなく、他の塾生の前で発表しないとイケないで、さらに負担は大きくなる。

それはさておき、このような視察を含めての費用すべては、その塾生が所属している企業が負担する五〇〇万円の受講料から拠出されるわけである。

バブルの時代ならばともかく、今のような時節に、しかもMBAなどの資格を取得できるわけでもない、教養主体の講座に社員を通わせるのに、この額を払うというのは、大きな会社でも役員レベルの決裁がないと許される話ではない。

だがそれだけに、この講座に送り込まれている社員は会社の上層部や人事担当者から

「五〇〇万円を使っても惜しくはない」と評価されている人材であろうことは想像にかたくない。つまり、「次代のホープ」「中核的な幹部候補生」と見なされているわけで、それだけに頭脳は明晰だし、経験値も高い。講師陣が「こんなに勉強熱心で、問題意識の高い学生はいない。教え甲斐がある」と褒めちぎるのは、当然のことなのである。

失われた日本の教養主義

だが、正直なことを言えば、この不識塾の前身である「四〇歳代CEO育成講座」を多摩大学で始めたときには、ここまで教養の世界、ヨーロッパ流に言えばリベラル・アーツの世界を深く掘り下げることになるとは思わなかった。

その当時の問題意識としては「アメリカは言うに及ばず、中国でもロシアでもインドでも、才能も野心もある若者が経済の第一線で活躍しているのに、日本では依然として、六〇歳まで待たないと企業のトップになることもできない。これでは世界に通用するリーダーなど出てくるはずもないし、日本の経済そのものが世界から取り残されてしまうだろう」という焦燥感のほうが強かった(残念なことに、その予感的中した)。

そこで当時考えたのは、将来を嘱望されている日本の若きビジネスマンに知的なトレー

ニングを施す場所が必要だということだった。

私はエリート主義に立つわけではないが、海外、ことにヨーロッパの社会は政治でも経済でも、一握りの人間が動かしている。人口比から見れば一パーセントにも満たないエリート集団があつて、彼らは若い頃から知的にトレーニングされているし、また自分が世の中を動かすのだという気概や誇りを持って働いている。

これに対して、残り九九パーセントの一般庶民たちは、同じ国に暮らしていてもそうしたエリートたちとはまったく別の世界に生きていると言つても過言ではない。

実際、教育コースからして一般の人とエリートとは行く学校も違う。

イギリスではパブリック・スクール、フランスではリセ、ドイツではギムナジウムという具合に名称や制度に多少の違いはあるが、将来、指導者層を目指す若者はこれらの学校（高校）でリベラル・アーツをしつかりたたま込まれたのちに大学に進むのである。

今の日本の高等教育では国文学の古典や漢文の比重はどんどん下がっているが、これらの進学校の文科系コースでは今日でもラテン語は必須だし、また哲学教育にも力を入れている。したがって大学では、基本的な教養は持っているという前提でさらに高度な教育が行なわれるわけである。

もちろん、こうしたエリート学校に行くのはほんの一握りの人たちで、たいていの人た

ちの通うのはもつと近代的な、すなわち実用的・実務的な教育を施す学校である。

この事情はアメリカでも大差はない。といつても、アメリカの場合はリベラル・アーツはもつぱら大学で行ない、法学、医学、経済学(経営学)などの専門的な学問は大学を卒業したあと、それぞれロー・スクール、メデイカル・スクール、ビジネス・スクールなどで学ぶという形になつていて、そこはヨーロッパとはやや違つている。

どうして日本人は世界のリーダーになれないのか

とはいえ、ヨーロッパでもアメリカでも本当の意味の「高等教育」を受けている人はほんの一握りであることに変わりはないし、そうした一部のエリートと一般人との知的水準の相違は「一億総中流」の日本人からは想像できないほど、大きい。

たとえば、それは海外での「日本イメージ」にも反映されている。

今、外務省などはアニメや漫画など、日本のサブカルチャーを海外に積極的にアピールしようとしている。たしかに、こうした分野においては日本は世界のトップクラスを行っていると言つても間違いではない。

しかし、こうした「日本文化」を愛好しているのは、もつぱら後者の人々、つまり全体

の九九パーセントを占める、庶民たちであることを忘れてはいけない。不識塾で海外視察をして出会う人たちももっぱらそうした人々で、だから「日本は文明程度が高くて、治安もよくてうらやましい」「一度旅行してみたい」と口々に言ってくれる。

だが、問題は国際会議などでしょうっちゅう日本の政治家やビジネスマン、あるいは学者と接触しているようなパーセントの人たち、つまりエリートたちの日本観である。

彼らは「日本人は何を考えているのか分からない」と口々にこぼすし、実際、日本の存在はきわめて薄い。国際的な会議やシンポジウムでは日本人はそれこそ「借りてきた猫」のようなもので、欧米人のように議論をリードしていかうとか、自分たちがルールを作っていくのだという姿勢が見られないのだから、そう思われるのも無理はない。

では、いったいなぜそうした場で日本人の存在感がゼロに近くなってしまうのか。その理由をずっと考えてきて分かったのは、そもそも日本には欧米のエリートならば誰でも共有しているリベラル・アーツの教養がないということであつた。

つまり、こうしたエリートと語り合い、意思を疎通するための共通の言葉、あるいは土俵がない。それでは「日本人は何を考えているのか分からない」という話になつてもしょうがないということに気付いた。

それは別に、会議やシンポジウム、学会発表などといった改まった場に限らない。欧米

人の自宅に招かれて会食をしたりするというプライベートの場でも、いったい何を話題にしているのかも分からないという日本人はあまりにも多いのである。

たとえば、ヨーロッパなどでホストがいちばん気を遣うことの一つはどのようなワインを供するか、ということである。どこの、どのような銘柄のヴィンテージ・ワインを出すかということにも、客をもてなす気持ちが表われているわけで、ゲストのほうもテーブルに出されたワインを見れば、どれだけ自分が大切に思われているかも分かるし、「こんな素晴らしいワインを出してくれて嬉しい」と言えば、そこから話も弾むだろう。つまりワインが一種のコミュニケーション・ツールになっているのだが、こちらがワインについての基礎的な教養を持たなければそのメッセージを受け止めることもできないので、せつかくの宴席も形式的なもので終わってしまう。

これは卑近な例だが、そうした話はいくらでもある。

商談やプレゼン、ビジネストークにおいて最終的に成否を決めるのは、極端なことを言えば、本題に入る前の雑談なのである。

単に安いものを仕入れるだけでよいのならば、今の時代、見積書をメールで送れば済む話である。それをわざわざ会って話をするというのは、どれだけ信を置くに値する相手であるか、同じ価値観を共有できるかを確認したいからに他ならない。ちよつと世間話をす

るだけでも、相手が世界をどのように見ているのか、現代の諸問題をどのようか考えているかが分かる。それを知るには会って話をするしか方法がないのである。

だが、残念なことに日本の「エリート」はそうした話になると、ぐつと言葉に詰まってしまうことが多い。「日本の企業はたしかに現場レベルでは強いが、トップの存在感がゼロだ」と言われるのは相手に語りかける「言葉」を持っていないからに他ならない。国際政治でも経済でも技術でも、日本は諸外国にひけを取らない「大国」であるはずなのに、リーダーシップを発揮できないのはそうしたところに問題があるからだろう。

リベラル・アーツなき現代日本の悲劇

では、そうした「コミュニケーション・ギャップ」を埋めるにはどうしたらいいか。

そこで大事になってくるのは雄弁術でもなければ、ディベート力でもない。相互理解の基礎となる教養、リベラル・アーツを身に付けることで、自らの見識を高めることこそが何よりも大事になってくる。

世界有数の経済大国になった戦後よりも、むしろ戦前の日本のほうが国際的に通用する人材を輩出できたというのも、やはり教育の力が大きかったのではないだろうか。

明治の元勳たちの多くは英語こそ流暢りゆうちやうに話すことはできなかつたが、しかし、彼らには漢詩や漢文、つまり中国の古典に裏打ちされた高い見識と志があつた。また、ヨーロッパのリセやパブリック・スクールを真似て作られた旧制高校においては、古典や哲学といったものを重視するリベラル・アーツの教育が行なわれていた。

当時、高校や大学に進学できたのはごく一握りの若者たちであつたが、そこから国家を担い、あるいは世界で活躍する人が何人も現われた。今の日本では高校はほぼ全入であり、大学進学率も男女ともに六〇パーセント近いわけだが、はたして日本の教育がそれに見合つた人材を産み出しているかと言えば、その答えは言うまでもあるまい。

先進国ならばどの国でも当たり前前の、リベラル・アーツ主体の高等教育が戦後の日本からなくなつた原因ははつきりしている。敗戦後の日本を占領したアメリカの意図によるものである。エリート育成機関としての旧制高校を廃止して「民主化」することによつて日本を弱体化させようとしたのである。そのアメリカの意図はまさしく的中して、今の日本ではどこの国よりも中間層が充実しているが、その上のリーダー層が皆無と言つていいほど存在しない。そうしたリーダー層、エリート層が欠落してしまつたことがどれだけ今の日本に禍根を残しているか、計りしれないものがある。

たとえば、いまだに日本のマスコミや政治家の中には「新自由主義は正しい」「規制撤

廃は正義だ」と信じている人が多い。

考え方はそれぞれあってもかまわないと思うが、アメリカがこうした主張をする背景にどのような歴史的事情、あるいは政治的意図があるのかをどれだけ理解しているのかと言えば、ひじょうに心もとない。新自由主義を主唱するアメリカの思惑どおり、「洗脳」されている人があまりにも多すぎるのだ。

昨今のTPP論議にしても、「規制撤廃か、保護主義か」といった二者択一式の、ひじょうに浅薄な議論が行なわれているのも、結局は新自由主義の背景にある思想の部分にまで踏み込んでいないせいであろう。それはTPP推進論者も、アンチTPP論者であつてもあまり変わらない。

ここではこのことをあまり深く掘り下げる余裕はないが、どんな思想であつてもそれが「正しい」ものであるためには一定の前提条件がある。

それが歴史的背景ということであり、マルクス流に言うならば下部構造ということであるが、そうした前提が満たされてはじめて、その議論は意味のあるものになるわけで、その主張がどこでも、いつの時代でも正しいという保証はどこにもない。

新自由主義の話でいえば、それが「善なるもの」でありうるのはあくまでも欧米、それも金融資本の側での話であつて、はたしてそれが日本にとって、あるいは世界全体にとつ

て善であるかというのは別の問題である。しかし、それを検討するには経済学のみならず、世界史、思想史、さらに哲学にまで及ぶ基礎知識が要求されるわけだが、残念なことに日本ではそこまで踏み込んだ議論が政治の場でも、メディアの中でも行なわれなない。それは結局、戦後の日本が経済成長や物質的充足だけを追求し、教養や伝統を軽視してきた、あるいは軽視するように誘導されてきた結果であろう。

コミュニケーション力とは

話が長くなってしまったが、不識塾は、そうした「教養のギャップ」を少しでも是正することで日本のお役に立ちたいと考えているし、将来の日本を支える若きリーダーたちにリベラル・アーツの力を知ってもらいたいと願っているのである。

そうした想いは幸いにして塾生にも伝わっているようだ。

毎年、新しく企業から送り込まれる塾生たちはかならずと言っていいほど、「なぜ会社の業務もあるのに、歴史や哲学などという浮き世離れした『お勉強』をしないといけないのか」という反発を感じる。すでに書いたように、不識塾は座って講師のお話を拝聴していればいいというものではない。その講師の指定する図書は何冊も読んだうえで、自分の

考えや仮説を整理して、それを講義の当日、みなの前で発表しないといけなのだから、「とんでもないところに送り込まれてしまった」という、一種の被害者意識を持つても不思議はない。

だが、講義の回数を重ねるたびに、彼らの目はどんどん輝きを増していく。

なぜそうなるのかと言うと、哲学や歴史を深いところで学ぶにつれて「なぜ、こんなことを知らなかったのか」という反省と同時に、仕事をしていくうえで何となく抱いていた違和感や疑問に対する答えが垣間見えるようになるからだと思う。そのときの爽快感は素晴らしい。文字どおり、「目からうろこが落ちる」。

もちろん、彼らは学生ではなく、ビジネスマンであるのだから、ここで学んだことをどのように自分の仕事に具体的に反映していくかが課題になってくるわけで、そこからの悩みの方がかえって大きいとも言えるのだが、だが、みなが口を揃えて言うのは外国、ことに欧米や中国とどのように向き合っていくべきなのかが見えてきたという感想である。

ことに、不識塾で学ぶ前に海外駐在をした塾生たちにとっては、実体験があるだけに「なぜ駐在する前にこういう話を知っていなかったのか」「今にして思えば自分は相手の論理をちゃんと理解しておらず、稚拙な対応をしていたことが分かった」と後悔を覚えるようだ。これはまさしく私自身の経験とも重なることだ。

その一方で、不識塾で一年を過ごしたあとに海外に赴任した塾生からは感謝の言葉が寄せられる。

というのも、こちら側にしつかりした知的な基盤があれば、海外でビジネスをする場合でも相手側の議論に引きずりこまれてペースを乱さずに済む。そればかりか、相手の主張を相対化して見ることができるから、交渉しても議論をしてもひけを取らない。むしろ相手に向かつて「君たちの手法は短絡的で、視野が狭い」と諭すこともできるし、「欧米人と日本人とは、こういう面で価値観が違うのだ」と相手を説得することもできる。

今日でも日本人は根強い英語コンプレックスを抱いているが、大事なものは語学力でもないし、小手先の交渉術でもない。ビジネスでも政治においてもリーダーに重要なものは、本質に根ざした教養や哲学を持つということであり、いかに英語が流暢りゅうちようであつてもそれが交渉力やコミュニケーション力を担保するわけではないのである。

「目からうろこ」体験の記録

本書はこの不識塾でテキストに使われている本を紹介することを主眼として作られた、一種のブックガイドである。

と言つても、普通のブックガイドのように推薦図書を、その内容をざつと紹介していくのではなく、不識塾で「師範」として、塾生のいわば指導役を務めている私とその仲間がそれぞれに塾で使われた課題図書の中で「これは面白い!」「目からうろこが落ちるとはこのことだ」とばかり、いたく感動した本を選んだうえで、みずからの「学び」の経験を通じて、その本の魅力や読みどころを紹介していくという構成になっている。

したがって、本書は単なるブックガイドではなく不識塾の「感動の記録」「目からうろこの記録」と言つたほうが適切なのだと思う。

読み進めていくうちにお分かりになるだろうが、本塾の師範は最初から「師範」であつたわけではなく、みなそれぞれにこの塾の持つ知的興奮や刺激に惹かれて集まつてきた面々である。たとえば前田建設の岐部一誠氏(87ページ)は、最初は本塾に社員を送り出す側であつたのがやがて自分も入塾することになり、そこでの「学び」があまりにも面白かつたので、結局、今度は師範になった人である。岐部氏は前田建設の経営に深く関わりながら、すでに一〇年近く師範を続けていただいている。このような事例を見るだけでも、本塾の魅力がお分かりいただけるのではないかと思うのであるが、いかがだろうか。

話が長くなった。前置きはこのくらいにして、いよいよ本論に入つていくことにしよう。

「資本主義以後」を生きるための教養書
中谷巖 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,500 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7237-4

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)